第三部　帝都

（一）雷鳴

ウルリッヒ・ケスラーが帝国宰相府にラインハルトを訪れたのは、帝国暦四八九年六月中旬のある一日。この日は、朝から晴れてはいたものの、気温と湿度はともに高かった。不快な熱気をはらんだ風に押し流された雲が空と地表を奇妙なまだら模様に染め上げて、見上げる人々の脚を家路に急がせていた。

主席秘書官たるヒルダの取り次ぎで、宰相執務室に通されたケスラーは、二人の密航者に関する密告があった旨を報告する。急速に翳りを深めていく空の色が室内まで忍び入る中、ラインハルトの金髪が残光をはじいて鮮やかな光をはらんだように見えた。

「旅券、入国査証とも公式のものと見分けは付かなかった旨、入管事務局より報告されております」

「偽造ではないと言うか？」

「真物の書類が偽名にて発行されていると見るべきと考えます。すなわち、発行者そのものが、今回の密航者に関わっていると考えるべきであると」

「卿はフェザーンが一枚噛んでいるというのだな？」

「御意。ことは小官の判断を超えますゆえ、ご報告に上がった次第です」

つかの間、視線を二葉の立体写真……ランズベルク伯アルフレットとレオポルド・シューマッハ元大佐の姿に据えてから、ラインハルトはケスラーの判断に理を認めた。『賊軍財産整理委員会』の活動を俟つまでもなく、帝国はフェザーンとの間に確執を抱え始めている。ここでリップシュタットの貴族連合軍の残党による密入国があり、背後にフェザーンの影が見いだせるという。政治的判断の必要性を認めたケスラーの見識は賞されるべきものだった。

「所在は分かっているのか？」

「手配はさせましたが、まだ発見の報告はございません。しかし、名と顔が判明している以上、時間の問題か、と」

「見つけ出したら、改めて指示を与えるまで監視をさせておけ。すぐに捕縛などさせてはならん」

ラインハルトの指示を肯い、退出するケスラーの背が一瞬、真っ白に染まった。間髪を置かず、複数の鐘を同時に突き鳴らしたような轟音が空一杯に弾け、窓ガラスをびりびりと震わせた。ラインハルトは改めて窓外に視線を投げたが、特に雷鳴に恐れを感じたわけでもなく、また感銘を受けた様子も見えなかった。

「帝国の歴史家どもは、ルドルフ大帝の怒号を雷に喩えているが、ご存じだろう、伯爵令嬢（フロイライン）マリーンドルフ」

「ええ、存じております」

「なかなか巧みな比喩だ」

讃えている口調ではなかった。厚い雲のたれ込めた空は、まだ夕暮れと言うにも早すぎる時間にも関わらず、日没後を思わせて日差しを完全に遮っていた。日没後を思わせる薄暮の空を、白銀の箭にも似た閃光が次々に走り抜け、重なり合うような雷鳴の轟きが建物そのものにさえ、微かな身じろぎを強いているかのような錯覚さえ覚えた。同時に天上の水門も開いたらしい。空から一斉に放たれた雨粒が、連なりわたる水流と化して地表を打ち叩き、見る見る白い飛沫と沛然たる雨音で帝都の中心部を包み込み始めた。

見る者によっては、最も原初的な恐怖に似た心理の揺らめきを

さえ感じさせる光景だった。ラインハルトの言う通り、歴史家の多くがそうした恐れを抱きつつ、ルドルフ・フォン・ゴールデンバウム、銀河帝国の始祖をして雷鳴になぞらえたに違いなかった。
窓外を見つめているラインハルトの表情に、しかし、少なくとも畏怖は見て取れなかった。華麗なほどの閃光をまといつけた雷光が、同時に数条、天と地表とをつなぐ光の柱を出現させ、耳を劈(つんざ)く雷鳴が帝都を揺るがした時でさえ、ラインハルトは表情を変えなかった。
「雷というやつは巨大な熱と光と音をもっているが、ただ荒れ狂うだけで何一つ、他を益することはない。まさにルドルフに相応しい」
ラインハルトの言葉に、ヒルダは特に反応しなかった。ラインハルトがルドルフに関して彼女と議論を交わしたいと考えているとは思えなかった。ルドルフ大帝という人物に関心がないわけではない。また、論じるに足りない人物と評しているわけでもない点では、おそらくヒルダはラインハルトと認識を一にしている。ただ、今は過去の巨人……様々な意味での……に対する論評を交換すべき時ではなかった。そして、ラインハルトもまた同意見であるはずだった。
「意見を聞かせてほしい、伯爵令嬢(フロイライン)マリーンドルフ」
室内に視線を戻したラインハルトの口調は、完全に帝国宰相、あるいは帝国軍最高司令長官としてのそれだった。なおも荒れ狂い、執務室の窓に無数の豆粒でも叩きつけるような騒音を響かせている窓外の天候が、彼の関心から離れたことは明らかだった。
ラインハルトの問いに応じて、ヒルダは応じる。
「わたしの知る限り、ランズベルク伯はかなりのロマンティストでしたわ」
余り新しくない記憶を、ヒルダはよく整理された記憶の底から掘り起こした。
「ランズベルク伯は詩も小説も好みましたけれど、はっきり申し上げて、詩は恐ろしく下手でした」
ヒルダ自身、韻文にはまったく関心がない。その彼女が読んでさえ、何が言いたいのか分からない譫言(うわごと)に過ぎないと感じられたものだ。それがランズベルク伯の詩の腕前だったが、一方、彼の書いた小説とやらは、少なくとも内容(なかみ)があった。小学生の作文並みには、という留保付きであるにせよ。
辛辣極まるヒルダの批評が、さして豊かでもないラインハルトのユーモアの感覚を刺激したらしい。秀麗な口元に微笑とも苦笑ともつかない表情を浮かべ、彼はヒルダの批評を肯定した。
「思うに、ランズベルク伯は完全な夢の世界の人ではなく、ロマンと自分の信じる行動を選び取る型の人間です」
ゆえに『行動的ロマンティスト』に類別される人間特有の行動パタンを示すだろう。
「すなわち、権力者に対するテロールです」
「その権力者というのはわたしのことだな。では、わたしを暗殺するつもりで帰ってきたのか」
ラインハルトの反問にヒルダは否定を示す。ランズベルク伯たちの密入国には明らかにフェザーンの関与が認められる以上、彼らの意図がフェザーンのそれから無縁のものであるはずはない。
確かに帝国とフェザーンは、旧門閥貴族の遺産を巡って互いに確執を抱く関係になりつつある。だが、それゆえにラインハルトを暗殺することがフェザーンの利益に直結するとはヒルダには思われないのだ。万一、ラインハルトに凶弾が及んだとして、帝国の反応は整然、かつ激烈なものとなるに違いない。現時点でライン

ハルトを失ったとしても、帝国はなお、彼の意志を継ぐべき人物を持っているのだから。この人物によるフェザーンへの報復は、残忍さというよりも、完璧なまでに理に叶った手段によって後世に知られることになるに違いなく、そうなった時、フェザーンの人間は一〇〇年後にフェザーンの名が人類社会の記憶からぬぐい去られてしまう可能性を怖れねばならなくなるだろう。

――――いや、仮に……そこから先をヒルダは胸の裡にのみ収めたのだが、その人物が昨年失われていたとしても、やはりラインハルトを今の時点で失うことはフェザーンにとって利益を意味しない。帝国の反撃は免れるにしても、必然的に帝国国内を覆うだろう、政治的な大混乱はフェザーンが帝国に有している権益と資産を悉く烏有に帰せしめる。

ゆえにあり得べき彼らの狙いは暗殺ではなく、要人誘拐。それがヒルダの披露した結論だった。

「対象として四名の方が考えられます」

「独りはわたしだとして、他の三名は？」

「最もあり得べき候補者は、現在、至尊の冠を戴いておいでです」

ヒルダは、あえて結論を先にした。

ラインハルトも同じ結論に達していたらしい。驚いた様子は見せなかったが、口調は意外さを強調していた。

「すると、あなたは、へぼ詩人が皇帝を誘拐すると……？ その意図は？」

「意図は不明です。不明ですが、フェザーンの利害、ランズベルク伯の為人を考えるに、最もあり得べき選択肢だということになります。おそらくフェザーンは、皇帝を誘拐すること、あるいは誘拐の意図を見せることで、何らかの別の計画を動かそうとしている。わたしはそう考えます」

「……たしかにあなたの言う通りだが……他の二人の候補者は誰だとあなたは考えるのか、聞かせてほしい」

「一人は……」

わずかに躊躇い、ヒルダはその名を口にした。

「閣下の姉上です。グリューネワルト伯爵夫人（グラフィン・フォン・グリューネワルト）です」

ちょうどその時、この日でも最大級の雷鳴が爆発的な音響で室内の空気を震わせ、執務室の窓全面が、戦艦主砲の直撃を受けた中和磁場さながらに白銀の一枚板と化した。予想に反して、ラインハルトは激情を炸裂させはしなかったが、ヒルダにはそれがラインハルトの怒りそのものに思えたほどだった。

「……だとすれば、今一人はキルヒアイス、ということになるな」

実際には声がわずかに低くなったのが、ラインハルトの感情を示す唯一の証左だった。ランズベルク伯たちの帝都潜入の報を前にしたときから、ラインハルト自身も彼らの目的と狙いについて考えを巡らせ、ヒルダと同じ結論に達していたに違いなかった。

「裏でフェザーンが糸を引いているとして、彼らが姉上やキルヒアイスを狙う気遣いは本当にないだろうか。彼らは良くも悪しくもリアリストだ。最も労少なくして功多いやり方をランズベルク伯に強いるという可能性はないだろうか」

「ランズベルク伯は古典的な騎士道を旨とするロマンティストでした。そのような人物がか弱い女性を人質にするような行為を容認するとは思われません。グリューネワルト伯爵夫人が彼らの狙いであるなら、ランズベルク伯でなくとも閣下への復仇を思う亡命者には事欠かなかったはずです。キルヒアイス提督について言えば、キルヒアイス提督を誘拐することが労少ないやり方とはわたしには思えません」

ヒルダの言葉はラインハルトの苦笑を誘った。ラキェンテスに移って既に五ヶ月。キルヒアイスの健康は確実に回復している。今のキルヒアイスを相手に誘拐を試みるなど、ランズベルク伯は

無論のこと、彼に同行しているシューマッハ大佐にしても無謀極まる行為に違いない。無論、なにごとにも不可能はないと言ってしまえばそうではあるにしても、そのための準備なり実行に要する知識なり技術を考えるなら、ランズベルク伯などという現実と夢想との区別も付かないような大貴族の御曹司が実行部隊に名を連ねていること自体が矛盾の極みである。

ヒルダは言葉を続けた。

「また、万一、フェザーンが権道の極に走ったとして、それでフェザーンが閣下からどのような利益を得られるにしても、閣下の決定的な怒りを買う結果になります。利に聡い彼らが、最終的に自分たちの破滅を意味する行為をランズベルク伯たちに強いるとは思えないのです」

「結局、フェザーンの黒狐か……今回の密告にしても、いずれ、やつらの自作自演だろうと思うが、どうだろう？」

「はい、閣下のお考えの通りかと思います。このようなことを申し上げるのは僭越かと思いますが、念のためラキェンテスの警備は強化すべきか、と」

「うむ……」

一瞬、苛烈なまでに表情を引き締め、ラインハルトは視線を中空に送った。

「そうしよう……それと、オーベルシュタインに連絡を。この件に関して、話しておく必要がある。できればキルヒアイスの意見も聞いておきたい。明日か明後日、ラキェンテスへ行く時間が取れるかどうかを確認してほしいのだ」

「わたしも同席させていただけますでしょうか？」

「そうだな……」

言いかけて、ラインハルトはかぶりを振る。

「いや、今回は遠慮しておいてもらおう、フロイライン。まだわたしの考えも決まっていないゆえ」

明晰すぎるほどのラインハルトの口調がこの時はわずかに乱れていたように、ヒルダには思われた。ひょっとしたら、『皇帝誘拐』の計画がある。その事実を彼女が知っていること。オーベルシュタイン参謀長に対して、ラインハルトはその事実を隠したいと考えているのではないか。

理由も何もない直感だった。ヒルダは論理よりも直感を優先させることになれていなかったが、なぜかこの時は直感が正しいことを悟っていた。ただ、なぜそう直感したのか、それこそヒルダには全く分からなかったのだが。

☆☆☆

「やらせてみるのも一興か、と存じますが……」

オーベルシュタインの声には抑揚がなかった。義眼に満ちた冷ややかな白っぽい光が、キルヒアイスの面上を通り過ぎ、ラインハルトに向け直される。

「現状の皇帝は“死んだカード”も同然。これを“生きたカード”に変えるには、なかなか面白い手段ではありますな」

「へぼ詩人が自分でこんな大それた真似を考えつくとは思えない。やはり拝金主義者（フェザーン）どもだと思うか？」

「ご指摘の通りか、と」

「皇帝を誘拐して連中に何のメリットがある？　皇帝を人質にして、わたしから身代金でも取ろうというのか？」

キルヒアイスの表情が曇るのを、ラインハルトは敢えて無視した。

“リップシュタット戦役”まで、ラインハルトはキルヒアイスを余りこの手の会議に参加させなかった。オーベルシュタインの

冷酷にして昏い情熱の赴く先と、常に曇りのない空を見上げている赤毛の親友の視線とは本来相容れない。ゆえに、正々堂々の大会戦はキルヒアイスに、謀略に類する隠微な策を巡らす場にはオーベルシュタインを伴うのが普通だった。

だが、“ガイエスブルグの惨劇”後、ラインハルトはこの“適材適所”を、すくなくともキルヒアイスに対しては一切止めることに決めていた。

「身代金を要求するのであれば、閣下の姉上を狙った方がはるかに多くを得られますでしょう」

オーベルシュタインの冷徹さから言えば、単に事実を指摘したに過ぎない。抑揚に乏しい口調がもたらした反応は激烈だった。

“生まれてきたことを後悔させてやる”の一言はなかったが、ラインハルトの白皙に鮮やかな血の気が昇った。

「……へぼ詩人はロマンティストだ。拝金主義者どもが姉上を狙えと命じても、へぼ詩人がうんと言うまい。へぼはへぼなりに騎士的ロマンティシズムとやらいうものを大事にはしているだろう」

お見事な分析です……オーベルシュタインは応えた。その目がちょっと不審そうな光を湛えてラインハルトを見返す。怒りを露わにしながらも、ランズベルク伯の性格を冷静に分析するラインハルトの言葉が違和感を誘ったのだ。

アンネローゼにかかわることである限り、この上官は感情を理性に優先させる傾向がある。ラインハルトに付き従う帝国軍の幹部たちに共通の認識である。ある者は『あの方も人間なのだ』と共感を持つ一方、『姉上があの方の“ジークフリードの肩”にならぬとよいが……』と眉を顰める者も少なくはない。オーベルシュタインは、どちらかと言えば後者に属する。

「わたしの考えも閣下と同じです。閣下へのテロなら、このシューマッハ大佐をリーダーとするでしょうし、グリューネワルト伯爵夫人を狙うのであれば、密告はあり得ますまい」

「姉上のことはもういい！」

ひどく不愉快げにラインハルトが遮る。

「話が逸れた――フェザーンはへぼ詩人とシューマッハを手先として皇帝を狙っている。異論はないか？」

「そして、その意図を隠すのではなく、閣下へリークしてきたのは、閣下に対するサインでありましょう」

はっとしたようにキルヒアイスがラインハルトを見つめる。さっきまで微笑みを浮かべていた表情が、見る見る険しくなる。

「まさか……」

「多分、そのまさかだろう」

“皇帝誘拐”に際し、フェザーンはラインハルト陣営の協力を要請してきている。

「つまり“死んだカード”を“生きたカード”に変えてやるから、見返りをよこせ、と？」

「お見事だ、キルヒアイス上級大将」

卿などに褒められても嬉しくはない……ロイエンタールであれば冷ややかに言い返しただろうが、キルヒアイスは愕然とした表情のまま、ラインハルトと総参謀長とに交互に視線を投げていた。

「――それで、どうなさるのです？」

「どうすればいいと思う？」

「やらせてみるのも一興かも知れません……そう申し上げたはずですが」

「――それは……！」

凍てついた視線が赤毛の青年の横顔を突き刺した。

「エルウィン・ヨーゼフ二世がこのままオーディンに留まっていても、ただそれだけのことだ。あの子供に与えられている役割と

いうものがあるとすれば、いずれローエングラム公が登極なさる際に譲位への同意書にサインをする……その程度だ」
「皇帝を誘拐し、自由惑星同盟をその黒幕に仕立て上げれば、大規模な征服戦を行うための大義名分ができる……ということですね？」
キルヒアイスを知る者なら、彼にでもこんな口調ができるのかと感心しただろう。爆発寸前の怒りと憤りの内圧で震えを帯びた、文字通りに吐き捨てるような口調だったのだ。
「言っておくが、ただ一つの石も取り除かず、一本の木も切り払わずして覇業は成り立たない。王道を歩むだけでは、いたずらに屍を積み重ねるだけになりおわることもある。今、敢えて言えば、帝国は戦いが必要なのだ。戦いを経ずして、ゴールデンバウムの帝国はローエングラム体制下の帝国には生まれ変われない」
「待て――」
オーベルシュタインの弁舌を遮ったのは、ラインハルトの断ち切るような声だった。
「今の段階でフェザーンと手を結ぶつもりはない」
「閣下……」
「卿の意見はよく分かった、オーベルシュタイン。採るべきだとは思う。このまま皇帝を放置していても何ら得るところはない。自由惑星同盟を併呑するきっかけを得られるのなら、一石二鳥ではある――だが……」
「――？」
「嫌だ」
幼年学校時代、気にくわない上級生にわるさを仕掛ける時のような表情になった上官に、オーベルシュタインはわずかに唖然としたようだった。が、一瞬の数分の一の沈黙を先行させた後のオーベルシュタインの反問は、たしかにこの義眼の男が非凡な知性の所有者であることを証立てるものだった。
「フェザーンの黒狐でありますか、閣下」
「これだけの大仕掛けだ。背後（うしろ）には必ず黒狐（ルビンスキー）がいる。卿には賊軍の財産整理を委ねているが、あの件の背後（うしろ）に隠れているのが黒狐（ルビンスキー）に他ならぬと報告したのは卿ではなかったか？」
オーベルシュタインは、しばらく無言で年若い主君を凝視していたが、やがて納得したように軽く頷いた。
「仰る通りか、と。黒狐めに、閣下が“皇帝誘拐”に加担なさったなどという事実をつかませたのでは、いつ剣のもう一方の刃が我らののど首を切り裂かぬとも限りませんな」
「自由惑星同盟はいずれ降さなければならぬとして、その前に賊軍の財産すべてを国庫に吸収し尽くさなければどうにもならん。それを妨げているルビンスキーとフェザーンの大商人どもは排除すべき害虫であって、手を組む相手ではないと言うことだ」
「それは宜しいでしょうが、余りに視線を対内的なものに限定すれば、旧王朝の体質がローエングラム公の統治システムに悪しき影響を残しかねません。ご賢察頂きたい」
オーベルシュタインにしてみれば、ゴールデンバウム体制からローエングラム体制への移行は、同盟における、選挙による政権交代とはレベルの全く異なる、一種の『革命』と称されるべきものである。従って、ローエングラム体制の確立とは、行政メカニズムの競技場（アリーナ）自体の解体（スクラップ・アンド・ビルド）と再構築を伴うものでなければならなかった。
「解体（スクラップ・アンド・ビルド）と再構築、すなわち旧体制下の官僚の総入れ替えを行う。そのためには戦時体制を理由にしたローエングラム公への一切の権限集中が不可欠なのだ」

古来、『革命』あるいはそれに近い形での政治体制の変革がなされる時、旧体制の官僚のみならず、彼らの存在を前提とした統治機構自体が一掃され、完全に一新した行政の実行組織が手作りされることが多い。これは新政権の首座に就いたものにとり、権力機構のトップがすげ変わった程度で一新されるほどに、官僚組織は脆弱なものではない。多く、新たな行政のメカニズムは円滑には機能せず、末端レベルでの軋轢を生む。摩擦が限界を超えると、新体制は破断界を超え、自壊と新たな政治的混沌への道を歩み始めるのである。この軋轢に耐えて行政の実を上げ得るようになるか否かにおいて、新政権の命脈の長さが測られると言っても良い。

一つの権力体制において、最高権力者がその肉体と精神を体現するものであるとすれば、官僚機構とは肉体と精神を載せる細胞組織、あるいは細胞そのものの基本的な性格を定め、受け継いでいくＤＮＡに他ならない。国家体制という一個の肉体が滅びたとしても、肉体を形作っていた遺伝子が国家の統治システムの形で受け継がれ、生き延びていく。

ゴールデンバウム朝銀河帝国は、旧銀河連邦の統治機構を巧みに簒奪する形で成立した。体制のトップに於いては、ルドルフのカリスマによる、本来不文律によって禁止されていたはずの首相と国家元首兼務の実現がある。これによりルドルフに対する一切の政治的制約が解除された。

他方、統治システムの簒奪は、連邦の官僚機構で進行していた議会制民主主義への激烈な嫌悪に乗じる形で行われた。主導したのは、ルドルフと相携(たずさ)えて軍を退役し、自ら望んで銀河連邦政府の官僚機構に身を投じたヨーゼフ・シュミット。後のヨーゼフ・フォン・シュミットバウアー侯爵だった。ヨーゼフ・シュミットの功を高く評し、侯爵号を与えると共に、『シュミットバウアーの進言を軽く聞いてはならぬ』と遺言したのは、ルドルフの人物眼を示すものと受け止めるべきである。

「すでにしてゴールデンバウム王朝を支えた三位一体……門閥貴族、帝国軍、官僚組織の内、リップシュタット戦役によって前二者は崩壊した。残るのは帝国政府の行政官僚機構である。ルドルフの政治思想の体現が出自である以上、その粛清なくしてローエングラム体制の確立はあり得ない」

オーベルシュタインの主張は、対外的な緊張を持続させ、ローエングラム体制の主導下に統治機構の解体(スクラップ・アンド・ビルド)と再構築を一挙に強行させようとするものだった。言ってみれば、統治体制の全面的な改変に伴う様々な軋みや犠牲を、対外的な戦時体制に伴う高度の緊張感の中に呑み込ませてしまおうという主張だった。

そのためには少なくとも向こう数年に及ぶ激烈な征服戦が必須である。無論、統治における高すぎる緊張度は民衆レベルでの疲弊と反感を招く。ラインハルトによる征戦は、永久運動にも似た旧帝国の外征とは異なり、どれほど長くとも一〇年を経ずして終息を迎えるはずである。また、そうでなければラインハルトの覇業は遂に未達のままに挫折の憂き目を見ることになるだろう。

「いずれにしてもフェザーンとの間で和平的な解決はあり得ない。その点について異論はない。同盟とのことは、その後になるが、和戦、いずれを採るにしても、ただの一戦もなく帝国と同盟が共存する未来もまた存在し得ないとわたしは考えている」

「そのようなお考えであれば、もはや小官があれこれと申し上げるところではありません」

オーベルシュタインの賞賛は、熱烈な賛嘆というよりも学生のレポートを評価する大学教授の口調に似ていたかも知れない。ラインハルトも参謀長から大仰な褒め言葉などは期待していなかった。ごく冷淡に受け流すと、すでにその視線は次の話題を捉えている。

「へぼ詩人とシューマッハはどうする。何か意見があるか、キルヒアイス？」
「直ちに逮捕し、連携の意思がないことをフェザーンに通告してはいかがでしょうか？」
弾き返すように返ってきた答えは、必ずしもキルヒアイスの本心ではない。察して、ラインハルトは覇気に満ちた微笑を浮かべた。
「それもいいだろうが……オーベルシュタイン、卿はどうだ？」
「閣下にはすでにご思案があるものと推察しますが？」
「キルヒアイス、代案はないか？」
「――― 閣下のお考えと同じです」
生真面目なキルヒアイスの応答に、オーベルシュタインがわずかに眉を寄せたようだったが、ラインハルトは無視した。有り体に言えば、彼はこの時、確実に充実を感じていた。彼が敢えて謀計の席にキルヒアイスを伴う理由がこれだった。オーベルシュタインの策をそのまま採ることは確かに彼の玉座への道を短縮する。その代わりに、その結果は常に彼の神経のどこかを強烈に軋ませるのだ。
野望の道をキルヒアイスと二人でまっしぐらに突っ走っていた時の、あの高揚感は、オーベルシュタインの紡ぎ出す辛辣な謀略からは得られない。たとえ、それが宇宙すべてを手に入れるのに最短の経路を彼にもたらすものであったとしても。
ヒルデガルト・フォン・マリーンドルフならあるいは評したかも知れない。ラインハルトを構成する相反する二面。鋼鉄（はがね）で作られた覇者の部分と、撚り合わされた繊細な銀の糸で形作られた魂の中核。冷酷なマキャベリズムの結果がもたらす軋みに悲鳴を上げるのはラインハルトの本質たる後者なのだ、と。
無論、この時のラインハルトにはそんな感慨はない。
キルヒアイスとオーベルシュタイン、ローエングラム陣営の武と謀を代表する二人の前に身を乗り出す姿は、眩いほどの覇気を纏った黄金の獅子以外の何者でもなかったのだから。
「あの二人は放置する。皇帝陛下が誘拐される恐れありとモルトに伝え、新無憂宮（ノイエ・サンスーシー）の警備を徹底的に強化させる。ケスラーには、へぼ詩人とシューマッハに二四時間、尾行をつけさせ、不穏な動きが一切できぬように監視下に置かせる。フェザーンの連中が彼らを消したりせぬように、保護も兼ねてだ。ケスラーにもモルトにも万一にも皇帝を奪われたときの償いは卿らの生命となるを覚悟せよと伝えよ」
「フェザーン領事館にも監視を」
鋭気に満ちた微笑がラインハルトの頬に白く走った。
「先回りするなら、さっさと卿の意見を述べるがいい、オーベルシュタイン」
「敢行させるのですな、誘拐を？」
「フェザーン領事館には、連中に気づかれぬよう監視の網をかぶせろ。連中が口にする半分も有能なら、監視されていることくらい気づくだろう。手を組もうというのなら、すべてにおいてわたしと互角であることを示すがいい。誘拐ができるというのなら、姑息な取引などせず、こちらの万全の警備をかいくぐるだけの腕を見せて見るがいいのだ」
「万一にでも誘拐が成功してしまったりしたら、どうなさるのですか、閣下？」
「その時は……」
ラインハルトは軽く肩を竦める。
「わたしの責任だ。私の責任において、皇帝を取り戻す。取り戻した上で、改めてフェザーンの罪を問う」
「どのような？」

オーベルシュタインの問いに、ラインハルトの微笑が鋭気に満ちて皓く走った。
「不敬の罪だ、他に何がある。元々フェザーンは皇帝の勅許によってその存在を認められた。実情はどうあれ、皇帝の寛恕によって存在を認められたものが、皇帝その人を誘拐するの不敬をなしたとすれば、フェザーンに対する勅許は効を失う。違うか？」
「それは万一にも成功した場合ですが、全く成功せぬまま、ランズベルク伯なりシューマッハなりがしくじりを演じて捕縛されるというシナリオの方が高い蓋然性があります。この場合、彼らの自白を以てフェザーンの罪を問うのも可能でありますが、フェザーンもその程度で音を上げるほどに世間知らずではありますまい」
「蓋然性については卿の言うとおりだ、オーベルシュタイン。ゆえに、ケスラーと、無論モルトにもだが、命じておく。時と場所を考えて捕縛せよ、とな」
同じ捕縛するにしても、フェザーンが関与を絶対に否定できない時と場所で捕らえさせる。片やケスラー率いる有能きわまる憲兵隊の監視があり、モルトによる堅固な新無憂宮（ノイエ・サンスーシー）の警護がある。さらに旧貴族への復仇と警戒の念を強める一般市民は、ランズベルク伯たちに逃走の自由を許さない。皇帝の誘拐に失敗した彼らは、ネズミのように追い回され、高い確率でフェザーン領事館へ逃げ込む。ボルテック弁務官が彼らを保護するなり始末するなり、彼らの関与を否定できない段階までことにタッチした時、領事館は強制捜査という名の襲撃を受けることになるだろう。
「御意」
「案じるな、キルヒアイス。俺は一〇歳にもならない子供を害させたりはしない」
最後の一言がキルヒアイスだけに向けられたことを、ラインハルトの使った一人称が示していた。

☆☆☆

こうして、六月二〇日、ラインハルトはフェザーン領事館に対して高等弁務官ニコラス・ボルテックの帝国宰相府への出頭を命じる。ケスラー麾下の憲兵一〇名余りに伴われて現れたボルテックに、ラインハルトはのっけから浴びせかけたのだ。
「皇帝の誘拐を策するとは、フェザーンは何を狙っている？」
「は――？」
何らかの前置きを期待していたのかも知れない。ボルテックの表情が、謹直さの仮面を僅かにひび割れさせたように見えた。ラインハルトにしてみれば、どのような形であれ、彼らと手を結ぶ意志を持たぬ以上、殊更にレトリックを弄ぶ必要性を認めなかったのだ。
「フェザーンに何の利益あって、そのような不敬を試みるのか、とそう訊いているのだ。答えぬというのなら、それでも良い。忠告をしておくが、尋問についてケスラーの腕を軽く見過ぎぬことだ」
ボルテックの額が照明を弾いて白く光った。いきなりの逮捕拘禁を匂わせるラインハルトの言葉は、ボルテックの仮面に入った亀裂を更に大きく広げたようだった。
「ご冗談を。フェザーンは常に皇帝陛下の忠実な臣僚でありましたものを……」
「では、皇帝の誘拐など考えたこともない、そうだな？ まったく身に覚えのないことを責められても答えることなどできぬと、そういうのだな」
「は――――いえ。そうではありません、閣下。我がフェザーンは、ローエングラム公が全宇宙を支配なさるにつき、そのご偉業に協

力させて頂きたいと考えております」
「それはルビンスキーの意思なのだな？」
「はい」
「その意思の表れとして、貴族どもの残党に皇帝を誘拐させようと言うのでは、卿の言う協力の意思とやらも怪しいと思わざるを得ないが、それはどうなのだ？」
「私どもの考えるところをすべてご高覧に入れたいと考えます。その上で、閣下には我がフェザーンの、閣下への好意をくみ取って頂きたいと……」
「前置きが長い。話すがいい」
ボルテックの言う『フェザーンの意思』が奈辺を指すか、ラインハルトには予め想像のつくところだった。ラインハルトばかりでなく、キルヒアイスとオーベルシュタイン、さらにはマリーンドルフ伯爵令嬢（フロイライン・マリーンドルフ）まで、彼の最も信を置く人々が衆知を集めた上での結論が、フェザーンの黒狐ごときの思惑に呼ばぬなどとはまったく思っていなかった。そして、ボルテックが得々として語った内容は、ラインハルトの視野から半歩すらもはみ出すものではなかった。誘拐した皇帝を自由惑星同盟に引き取らせて亡命政権を作らせることで、ラインハルトに自由惑星同盟倒滅の軍を起こさせる大義名分を与える――ラインハルトは苦笑する。もし、自分の人生に残された時間があと二、三年で、一刻も早く全銀河を統一したいと焦っているなら、あるいは門閥貴族なき後、さらに戦うべき相手を渇望して猛り立っているというのならともかく、そうまでして名分を得ねばならぬ理由を、この時のラインハルトは見いだすことができなかった。
「――なるほど、卿の話はよく分かった」
「お分かり頂けましたか――」
熱弁を揮う内に噴き出した汗を拭い、少しく冷えたコーヒーをボルテックが口に運んだタイミングで、ラインハルトは次の言葉を放った。
「それでわたしはどうすれば良い？ フェザーンの好意に泣いて感謝すればよいのか？」
「そう皮肉を仰いますな」
「では、何をして欲しいかはっきりと言え。フェザーンは商人の国だ。一方的に好意だけを示して見返りを示さぬなど、商人ともあろうものがありえぬことではないか。それとも卿は商人になり得ぬゆえに役人になった無能者だとでも自らを誹る程度の人物か。いずれにしても、そのような戯言なら聞くだけ無駄なことだぞ」
「では単刀直入に申し上げます」
軍事・政治上の一切と世俗のすべての権限をラインハルトに、一方、全宇宙的な経済的権益、就中恒星系間航路（なかんずく）の商業権益をフェザーンが貰い受けたい。ボルテックの回答はラインハルトを退屈させた。ラインハルトが銀河を統一して後、フェザーンは帝国の一地域の独立政体として現在の統治形態を引き継ぎたいという主張もまた、彼らの真意を覆い隠す隠れ蓑、あるいは鎧の上の衣としてしか見えなかった。かつ、自由惑星同盟による皇帝の受け入れと亡命政権の樹立は、フェザーンが責任を持って工作するという。失敗した時、どのように責任とやらをとるつもりなのか、ラインハルトから見れば笑止の極みだった。
「――いいだろう。卿、というよりフェザーンだな。フェザーンが何を欲しているか、よく分かったように思う」
「……では？」
「ただ、卿は忘れているようだな」
「は――？」
この上に何を要求する気なのだ、この孺子は。隠そうにも隠し切れぬ苛立たしさが、ボルテックの面上を走り過ぎたように見え

た。ラインハルトの態度が粗野さこそ欠くものの余りに高圧的で、かつ予想を超えて直截的なために、会談を通じて終始気圧され続けているのが、外交の専門家を自負するボルテックにしてみれば癇に障ることに違いない。無論、ボルテックの矜持になど気を遣ってやるべき理由など、ラインハルトにはまるでないのだが。

「二つある。一つは賊軍の財産の件だ。幾ら、この件で卿らが好意を主張しようとも、あれは本来帝国のものだ。帝国が貴族どもに与えたものを、卿らは預かっていたに過ぎぬ。本来の所有者がヴァルハラに赴いた以上、彼らにそれを与えたものが跡を継ぐ。それを卿らが認めぬというのであれば、他にどのような好意を示されようとも、それは単に我らの目を他にそらすための口実に過ぎぬ」

一瞬、物理的な打撃を受けたかのようにボルテックの身体が揺れ、上体がのけぞるように動く。ラインハルトの突き出した言葉の槍は、予期した方向とまるで異なる角度からの打撃となってボルテックのガードをかいくぐったに違いなかった。

「それは……しかし、全銀河を統一なされば……」

「統一すれば、そのような些細なことはどうでも良いというのか？では、わたしが同盟を平らげたとしても、彼らの遺産は、それが正のものであれ負のものであれ、それが卿らの預かるものである限りは卿らのものだ、とそう言うのだな？」

オーベルシュタインら『賊軍財産整理委員会』の調査結果だった。帝国との戦いを続ける中、同盟が莫大な負債をフェザーンに対して背負っており、経済的には既にフェザーンの半植民地と言って良い状態にあること。特にアムリッツァの大敗北以降、同盟政府の支出が加速度的に増えている一方、その大半が軍備の再建と戦死将兵遺族への一時金と年金に費やされ、経済と産業の再建は遅れる一方であるらしいこと。結果、同盟内部でも政府による投資の粗密が経済的格差を急速に拡大し、政治的な結束と社会的規範の弛緩が進んでいる。同盟軍もまた例外ではなく、前線では士気と練度の低下が著しく、後方では上級士官による涜職が急増していると言う。

要するには同盟は、政体としては崩壊期に入っている。

ラインハルトは、彼の好敵手と謳われる同盟軍のヤン・ウェンリーほどには歴史への造詣は深くない。しかし、今の同盟のような、言ってみれば崩壊期へ足を踏み入れた政体が創生期の活力と生命力を回復するのはほとんど不可能に近いことも、彼の史実に関する知識に鑑みればほぼ自明のことだった。同盟が今の状態を脱するとすれば、選択肢はほぼ二つに限られる。一つはカリスマ的な中興の英雄の登場による大改革であり、今ひとつは強烈な外圧にともなう新たな政体への脱皮である。

考え、ラインハルトは同盟が不完全ながらも、それらのいずれの選択肢をも採り得ることに気づいた。カリスマ的な英雄というのであれば、彼らはそれを持っており、その英雄はイゼルローンにあって帝国の侵攻への鞏固な防波堤となっている。強烈な外圧と言えば、他ならぬラインハルト自身がそうである。今、彼の面前に座して賢明に弁舌を揮っているこの男、ボルテックの口車にラインハルトが乗るとして、同盟政府もその市民もたちまち、自分たちが享受しているのが薄氷の上での権力遊びであり、巨大な災厄を目前にした日常でしかなことに気づくはずだった。

その上で、あの男が果たして『救国の英雄』などという立場を受け入れるかどうか、興味のあるところに違いない。

当否について思いを巡らそうとして、ラインハルトは直ぐに無駄を悟った。結論を得るには、彼はヤン・ウェンリーのことを余りに知らなさすぎた。彼のみならず、彼の幕下でヤンと直接相まみえた経験を持つ……それも戦場以外で……のは、キルヒアイス

ただ一人である。同盟の政体としての生命と、政治的存在としてのヤンに関する考察は将来の楽しみとしておくしかなさそうだった。

不自然にならない程度の沈黙は、思いを言葉にまとめ直すのに必要な最小限度の時間だった。蒼氷色の視線を相手に据え直し、ラインハルトは二の矢を言葉に変えた。

「卿らの論理が正当さを持つのであれば、わたしが同じことを言ったとしても卿らは苦情を申し立てることはできぬのではないのか。つまり、同盟が所有している卿らへの負債は卿らが勝手に引き継げばよい。もしわたしがそう言ったらどうするつもりなのだ？」

「――――そ、それは……」

ラインハルトの論理は、ボルテックの面上から完全に血の気を失せさせるに十分だった。フェザーンは帝国の一地方でしかない。それがフェザーンの地位に対する帝国での公的な位置づけである。にもかかわらず、フェザーンの多くの銀行が同盟政府債の最大の買い手となっているのだ。帝国とフェザーンの建前上の関係から言えば、同盟政府債をフェザーンの銀行が買うことなどあり得ないわけであり、仮にラインハルトが同盟を軍事的に掃滅、その支配を引き継いだとしても、もともと存在しないはずの負債を引き継ぐ必要もまた存在しない。

蒼白になったボルテックに、しかし、ラインハルトは言葉を緩める要を認めない。ボルテック、すなわちフェザーンはラインハルトを甘く見ていた。軍事しか頭にない若僧と侮り、手玉に取れるとタカをくくっていたのだ。増長の極みであり、取り返しのつかぬ過ちであったことは骨身に沁みて思い知らせてやる必要があった。

「今ひとつ、卿の忘れていることがある」

「――――？」

「また、同盟に和戦いずれを求めるかはわたしの手の内にある。卿らの助けを求めるまでもないということだ」

「は――――!?」

これは完全にボルテックの予想外、予想していたとしても今の段階でラインハルトがそう断言するとは思っていなかったに違いない。

『いずれも選択肢の内にありと判断します。戦を求めるのは容易であり、ごく初歩的な挑発によってその目的は達せられるでしょう』

キルヒアイスが上申してきたことがあったのを、ラインハルトは思い出していたのだ。

『一方、和を求めるなら、その糸口はイゼルローンにあります。和を求める道は、イゼルローンをその扉としても、困難に満ちたものとなると思われます。しかし、私見を述べるなら、ヤン提督とその部下たちは敢えて、その困難を共にするに足る人々と見受けられました』

同盟とヤンの関係はともかく、キルヒアイスの報告はラインハルトに貴重なインスピレーションを与えた。戦いを求めると言うだけなら、今の同盟は幾らでもその隙を与えるだろう。謀略を重ね、往く道に無用の犠牲を重ねる必要などなにもない。むしろ、和を求め、共存を求める方がはるかに困難で険しい道を往くことになるだろう。

「汗を拭け。いくら、銀河を統一する名分が与えられたとしても、ただちに兵をイゼルローンへ投げ入れるというのでは歴代のゴールデンバウムの皇帝となんら変わるところがないではないか。それともフェザーンは、帝国軍がイゼルローン回廊を死屍で舗装するのを期待しているのか……ありそうなことだな。帝国と叛徒ど

も相争わせ、共倒れにした結果、フェザーン一人が漁夫の利を占める……か」
「考えすぎでございます、閣下」
入ってきた時とは別人のように弱々しい声音の抗弁は、もはやラインハルトの聴覚を刺激しても、理解も共感も呼ぶものではなかった。
「まあ良い、フェザーンにはフェザーンの利益と主張がある。それは認めよう。だが、言っておくが、それは帝国とて同様、同盟にして然りだ。わたしは卿の申し入れについて顧慮するつもりはない」
「か、閣下、それでは――――？」
「フェザーンが皇帝を誘拐したいなら勝手にするがいい。誘拐した皇帝を自由惑星同盟に連れて行こうが、亡命政権を樹てようが、それは卿らの選択というものだが、わたしが卿らの選択肢に付き合わねばならぬ理由は、宇宙の果てまで探してもありはしないということだ」
ボルテックのかぶっていた『謹直で有能な外交官』としての仮面を、ラインハルトのその言葉が完全に割り砕いた。ボルテックの両眼が唖然と見開かれ、顎ががくんと落ちる。額から拭ったばかりの汗が幾筋も垂れて、頬を流れた。ラインハルトの反応は、ボルテックの予想を数層倍して苛烈であり、しかも全く逆の指向性をもって彼の肺腑を貫いたのだ。
「卿はまだ老い朽ちる歳でもなかろうに物忘れが酷いようだな。ついでにもう一つ思い出させてやるが、今のわたしはローエングラム公の名を頂いている、皇帝の臣僚にほかならない。皇帝の身に危害が加えられれば、加害者への復仇はわたしにとっての神聖な義務でもあるのだ。それに、わずか七歳の子供を保護するという、人として最低限の規範程度は同盟に期待してもよいと思っている。同盟が卿らに対して負っている負債が、彼らに道義の心を思い起こさせるだろうことも、な」
あるいは、ラインハルトが振り下ろした言葉の白刃を、物理的な一撃にすら感じたかも知れない。ボルテックはソファの上で姿勢を保ち続けるのも困難な様子だった。窒息寸前の観賞魚を思わせる表情で大きく喘ぎながらも、なお最後の抗弁を試みる。
「誤解であります、閣下。ランズベルク伯たちには直ちに帝都を……」
「無駄だ」
もはや僅かな妥協の余地を残す必要性すら、ラインハルトは認めなかった。フェザーンは失敗した。失敗を、彼らはこれまで一〇〇有余年にわたって保ち続けた半独立、というよりほとんど独立国としての地位を失うことで償わなければならない。
「ランズベルク伯たちには監視をつけてある。わたしに互角の交渉相手と認めて欲しければ、わたしの監視下で皇帝を真実、誘拐してみせるが良い。皇帝の身を卿らに奪われれば、わたしはその臣僚として、卿らに交渉のために頭を下げることを考えよう。ランズベルク伯たちは、身分を偽り、帝都に入った。いつでも罪に問えることを忘れるな」
止めの一撃だった。宰相府を退出するボルテックの顔色はもはや死人と変わるところはなかった。

上機嫌で宰相府へ出頭していったボルテックは、両脚どころか肩口までを絶望と恐怖の泥沼に引き込まれながら半ば這うようにして領事館に戻ってきた。有能極まる自治領主の補佐官であったはずのボルテックだったが、ラインハルトから立て続けに浴びせられた打撃は、彼が抱えていた数々の巧妙な計算も打算も計略も、

何もかもをもまとめて宇宙の果てに吹き飛ばすに十分だった。
　出迎えた書記官たちを追い払い、弁務官執務室にたどり着いた時もボルテックの脳裏は完全に空白だった。まさか、ラインハルトがあれほどまでに強硬にフェザーンとの共闘を拒絶し、あまつさえ皇帝誘拐を正面から拒止する意思を示そうとはまるで予想していなかったのだ。このようなことになるのであれば、ランズベルク伯たちにはあくまで作戦を進めさせ、実際に皇帝の身を確保してから接触すべきだった。ラインハルト自身が言明したように、皇帝を人質に取られれば、ともかくも交渉のテーブルにはつかざるを得ないのだから。もっとも、ラインハルトのあの強硬ぶりから見て、皇帝を確保したところで交渉が思惑通りに進むとは限らないが、それでもフェザーンの最も得意とする交渉術と謀略とを駆使する機会は十分に得られたに違いなかったのだ。
　首筋にうそ寒いものを感じてボルテックは襟元をかき合わせる。気温に冷涼さを感じるはずもない六月下旬の帝都である。物理的な低気温と言うよりも、彼自身の地位が決定的な危機に瀕している。その事実から来る精神的なダメージが、体温までも低下させているかのようだった。
　何よりも彼の後に自治領主補佐官に収まったというケッセルリンクなる若僧の存在がある。フェザーン側と亡命貴族側の準備を整え、ランズベルク伯とシューマッハを無事に帝都へ送り込んできた。その手際の良さはケッセルリンクの有能さを示して余りあった。そのケッセルリンクが整えたお膳立てを、帝都でボルテックが何もかも破綻させた。第三者的にはそう見るしかない状況である。ラインハルトの旗艦『ブリュンヒルト』がフェザーンの軌道エレベータに横付けする頃には、ボルテックはこの世の住人ではなくなっているだろう。ルビンスキーの怒りは無論のこと、無様な失敗者を地球教総大主教（グランド・ビショップ）は決して許すことはあるまい。ルビンスキーの先代自治領主がよい例である。
　では、どうすればよいのか。ランズベルク伯たちを始末して口を拭うか。しかし、おそらくラインハルトはあの後直ちにランズベルク伯と、おそらくはこの領事館の監視を強化している。ランズベルク伯に手を出した瞬間、ランズベルク伯のみならず刺客も捕縛の憂き目を見る。その次に来るのは、彼らの証言をもとにしたフェザーン領事館の強制捜査。そして、皇帝誘拐に関する決定的な証拠をもとに、帝国軍はフェザーンへの侵攻を決定する。
　では、あくまで当初の計画通り皇帝の誘拐を強行するか……だが、すでにランズベルク伯たち実行部隊の存在を、よりによってボルテックみずからの指示で密告させてしまっている。密告さえしていなければ、ラインハルトたちが皇帝誘拐の計画に気づくのはずっと後になってからであったはずなのだ。
　ラインハルトのもとで帝都防衛の指揮をとるのはウルリッヒ・ケスラー大将。もともと艦隊指揮官だった彼が、憲兵総監に任命された時、周囲は『門外漢がそう簡単に憲兵隊を押さえ込めるものか』と見る向きが強かった。それが就任以来何日もしない内に憲兵隊はケスラーの指揮に完全な服従を誓い、だけでなく帝国でも最も有能で公正な治安維持組織として機能している。端倪すべからざる有能さだった。
　そのケスラーの目をかいくぐって皇帝を新無憂宮（ノイエ・サンスーシー）から攫い出すことが叶うか否か……何の憂いもなさそうに見えるランズベルク伯の太平楽な表情が脳裏に浮かび、ボルテックを呻かせた。
　せめて彼の補佐に充てられている……シューマッハが実行部隊の長であったなら、いくらかでも事情はましであっただろうに。何らかの手段でラインハルトとコンタクトし、その合意の許で確実に皇帝を帝都から引き攫う。それが計画の基本の基本であったから、実行部隊のトップはそれらしい地位を持った門閥貴族の出

身者でありさえすればよかったのだ。計画はルビンスキーの発案であり、その意味で責任はルビンスキーにある。
　強弁したいところだったが、『何らかの手段でラインハルトとコンタクト』の何らかの手段の選択と行使を委ねられたのはボルテック自身にほかならない。自信満々に計画のリークをきっかけとしたコンタクトを選び、ものの見事に失敗したとあっては、そんな詭弁が通じようはずもない。
　ドアがノックされ、ボルテックは文字通りに椅子から数センチ飛び上がった。
「だ、誰だ⁉」
　もう総大主教かルビンスキーの刺客が訪れてきたのか……この時のボルテックの思考はパニックに近い。
「弁務官……あの、客人が、弁務官にお会いしたいと……」
　一等書記官だった。
「誰も通してはならんと言ったはずだ‼」
「分かってはおりますが……ヘル・ベルモントからの紹介状を持って来ておりまして」
「ヘル・ベルモント……だと⁉」
　そんな男は知らん――― 怒鳴りつけかけ、ボルテックは気づいた。ヨーゼフ・ベルモント……入国に際してレオポルド・シューマッハが名乗ったはずの偽名である。
　追い返せ、と怒鳴りかけて、もう一度、ボルテックは思い直した。
「来たのはいつだ？」
「弁務官がお出かけになった直ぐ後です。何時間でも待つと申しましたもので、第三応接室に待たせてあります」
「……」
「追い返しますか？」
「……」
「……それと、そのベルモントたちにですが、今日中にゴーサインを出すかどうかを知らせることになっていたはずで、それはどうしましょう」
「話は後だ。まず、その男に会おう。呼ぶまで、誰も第三応接には近づけるな」
　蹌踉とした足取りを辛うじて踏みしめ、ボルテックは第三応接室……極秘の客だけを通すために念入りな防諜設備を整え、さらには地下道を通じて隣接する建物から外へ出られる仕掛けまでしてある……へ向かった。
　意に反して、第三応接で待っていた男は若かった。短くした髪は金色だったが、染めているらしく頭皮に近い辺りから栗色が差し始めている。
「あ、どうもっス。ベルモントさんに頼まれてお使いっス」
　立ち上がった若僧の口調は軽い。フェザーンにも珍しくない、脳天気で学のないちんぴらといった感じのしゃべり方だった。
　だが、ボルテックの注意を惹いたのは若僧の無駄のない身のこなしと、明らかに徹して鍛えられたことの見て取れる二の腕の筋肉だった。訓練を受けた、それも専門的な教育のもとに練成された暴力の専門家……フェザーンでは機会が少ないとは言え、職業的な傭兵に会うチャンスは並のフェザーン人よりも遥かに多かった。
「紹介状を見せて貰おう」
　何の変哲もないタイプ打ちの紹介状を一読し、ボルテックはそれを卓上の灰皿の上で燃やした。
「わー、ほんとに燃やすんスね、すっげー‼」
「無駄口を聞いている暇はない。ベルモントからの伝言を言え」
「手にはいるだけの情報をくれって。今すぐに。表歩けるのはあ

と半日くらいだから、これから地下へ潜るって言ってたっスよ」
「情報だと？」
「ええと……」
　若僧の並べ立てるリストにボルテックは仰天し、同時に、こんな情報を手に入れてどうするつもりなのかと首を捻るしかなかった。皇帝の誘拐を狙うのに、なぜリゾート地の情報などが必要なのだ。ラキェンテスと言えば、キルヒアイス上級大将が療養中だし、ラインハルトの姉であるグリューネワルト伯爵夫人もそれに付き添っていると聞くが……
「まさか、グリューネワルト伯爵夫人に……？」
　そんなことをしても無駄だ。彼女を人質にして有効なのは、ラインハルト自身の行動の自由をもフェザーンがコントロールできる時に限る。さもなければ、ラインハルトの一層の激昂を買うだけで、フェザーンには一マルクの利益にもならない。
　だが――
「グリューネワルト伯爵夫人って誰っスかぁ？」
　若僧にはまったく話が通じない。
　ボルテックは諦めた。
「……これをどうやって届けるのだ。これだけの情報量を流せば必ず帝国に気づかれる。どれだけ暗号化しても、帝国軍が全力を挙げれば一週間は持たないぞ」
　ボルテックの危惧に、やはり若僧は反応しない。へらへら……と言う以外、どのような表現も思いつかない笑いを顔面に貼り付けながら、自分の顔を指さす。意味が分からず怪訝な視線を送り込むボルテックに、若僧は何度も自分を指さす仕草を繰り返した。
「持って帰るのか、お前が!?」
「でっきるだけ小さいメモリチップに入れてくれねぇっスか。でかいと出す時大変っスから」
「出す時だと……？」
「いいから、急いでくれねぇスか、おっさん」
　ラインハルトとはまったく別の意味で癇に障る若僧だった。多分、年齢もあの金髪の孺子と同じくらいではないのか……思い、部下に命じて締め上げてやろうかとも思ったが、この若僧が真物の職業傭兵である可能性に思い当たって断念する。彼の想像が当たっていれば、締め上げるどころではない。この孺子ひとりで領事館員全員を片手で皆殺しにするだろう。
　再びボルテックは重大な疑問に突き当たる。ベルモントことシューマッハはいつ、どうやって職業傭兵とコンタクトしたのか。彼らの料金は高い。フェザーンで農場をしていたというシューマッハ、恩賜の宝石を売り払って辛うじて日々の生活を立てていたランズベルク伯、いずれもそんな余裕はないはずだったし、第一コネがない。また、ケッセルリンクも彼らにそんなコンタクトを許すような甘ちゃんでもないはずである。
　そう思い、ボルテックは心臓が躍り上がるような思いを味わった。手段は不明にしても、シューマッハが傭兵を『お使い』に出せるほど身近に置いているなら、あるいはラインハルト陣営の監視を突破して所期の目的を達するかも知れない。仮に失敗しても、あの金髪の孺子の鼻をあかせるようなところまでは事を進められるかも知れない。そして、孺子は言った。対等に交渉したいなら、それだけの腕を見せてみろ、と。これは、あるいは唯一の機会というものかも知れないではないか。
　ボルテックは一等書記官を呼び、若僧の要求した情報を掻き集めさせると、それを超小型のメモリチップに封入させた。急がせたが約三時間。チップが第三応接室に届けられた時、すでに時は深更に及んでいた。
　小指の先ほどの大きさのそれを手渡され、若僧は満足そうにに

たりと笑った。
「じゃ、ごちそうさんでっす」
ポケットから出したカプセル……流線型をした、チップより一回り大きなケースに見えた……にチップをねじ入れるや、若僧はひょいと投げ上げる。
「な――――」
何をする……とボルテックは言い終わることはできなかった。
綺麗な放物線を描いて頂点までの旅を終えると、カプセルは重力に引かれるままにフロアへの旅を再開する。フロアに到着するよりも遥か前に、カプセルはあんぐりと口を開いてまっていた若僧の、その口腔へスポンと音を立てそうな鮮やかさで吸い込まれた。ふてぶてしいほどに逞しい喉元で喉仏が大きく動き、嚥下の動作を示した。
「きさま、飲んでどうする!?」
「だから言ったじゃないスか。でかいと出す時に大変だって……」
あろうことか、自分の尻を軽くポンポンと叩くと、若僧は小馬鹿にしたようにボルテックに一礼して見せた。
「案内してもらえッスかぁ。ここって秘密出口あるって聞いて来たんスけど……?」
「な……」
「おっかねぇ憲兵が外で待ってるんで。できたら殺しは避けろって言われてっし、そこんとこ、よろしくぅ」
最早、何をいう気力もなかった。
ボルテックは自ら立って、この訳の分からない若僧を地下通路へ案内した。
「わー、すっげぇ、まるで秘密結社ん家の秘密基地みたいじゃないっスかぁ……」
などとはしゃぎ声を上げつつ地下通路に消えるのを見送った後、ボルテックは改めて一等書記官を呼んだ。当初の計画通りに皇帝誘拐を実施することを告げるためと、前祝いの祝杯のためのシャンパンを持ってこさせるためだった。もっとも後者は祝杯ではなく、不安を無理にでも鎮めるための鎮静剤と言って良かったのだが……さしものボルテックにも、自分の判断がいかなる結末を招くことになるのか。その点に関して自信の持ちようもなかったのである。

フェザーン領事館を監視していたはずの憲兵が一名、行方不明になったとの知らせは、翌朝早くにケスラーの許へもたらされた。ラインハルトからはボルテックに対する交渉内容がすでに通知されてきていたため、ケスラーはことを重視した。直ちに一〇名からなる捜査チームが編成され、失踪した件の憲兵の捜索を開始したが、その行方を突き止めることができたのは、その二週間後のことであり、かつ、発見された憲兵からは何の情報も得られなかった。彼は何者かに殺害され、帝都郊外の人工湖に投げ入れられていたのである。
大胆不敵な犯行だったが、憲兵隊の名誉に賭けての執拗な捜査にも関わらず、犯人は杳として知れなかった。
そして事件の糸口が見つからぬまま、帝国暦四八九年七月、その事件は幕を開けた。